國際日本語構成の理論

石黒魯平

一、國際日本語の概念

一、私は今、國際補助語の Quo Vadis? に思ひを潜めて居る。地上二千の言語並立、之は人類共同の一大障碍である。而してこの事實は、たとへ二千を一千にし一百にするといふ豫想を是認しても、つねに之を一にまとめ、世界一言語とする豫想を許さない、人類の運命である。斯る運命にある人類に、言語分立の障碍を免れしめる道は、國際補助語の構成を措いて外にない。三百年前のデカルト、二百數十年前のライブニッツに源を發した六百に近い人造語の出現は、思ふにこの道をたどるものであつた。併し比較的優勢であつたシュライエルのヴオラピーク Schleyer: Volapük（一八七九年即ち明治十二年發表）さへも、その動機に完全に答へる用意を缺いてゐた位で、國際補助語の正しい認識に到達してゐなかつた。

二、千八百八十七年（明治二十年）之は國際補助語の認識の完成した、記念すべき年である。この年七月ワルシヤウの眼科醫ザメンホフが『エスペラント（希望者）の言語』を發表したのである。諸民族固有の言語は奪ふべからざ

る生命の言語である。この間に中立公平な橋となる言語、之が『エスペラントの言語』である。之がザメンホフ博士の根本的精神であつて、國際補助語の概念は之で完全に言ひ盡されて居る。造語法に於て、ヴオラピークの代表する先天式を棄てて、後天式を採つた聰明さが、その後案出された幾十の人造語に範を垂れたことは大いなる事實であるが、何よりも國際補助語の概念を把握したザメンホフの大精神が、その後に來るものに正しい進路を示したことは、更に一層根本的の重要事である。吾人が日本語を愛し、各國自然の言語を重んじながら、尙人造エスペラントを歎賞するのは、實にこの精神を尊ぶが爲である。エスペラント以後數十の國際補助語が案出せられても、又言語學者の型を破つて自己の人造語ノヴイアール Novial に凝り込んでゐるイエスペルセンの力を以てしても、エスペラントが獨り國際補助語の使命を引受けて、堅實に普及の度を進めてゐるのに拮抗することが出來ないのは、實にこの精神の高く强いエスペラントであるが爲である。

三、然るに千九百十七年のロシヤ革命は、この國際補助語の根本精神にひびのいる事態を招來した。エスペラントの根本精神は僅か三十年にして大變革のうき目を見るに至つた。革命家はエスペラントを、從來不明のままで傳つてゐた世界語、普遍語の、最惡の意味に於て採用する。卽ち世界一文化、一言語といふ空想を目標として、エスペラントを各民族自然言語の撲滅に役立たせようとするのである。從て補助語であるといふのは、この世界一言語段階への過程に過ぎないとする。この考への正否は論ずるまでもないことであるが、ともかくエスペラント主義者は今明かに新舊二派に分裂して、到底調和の見込みがない。そしてそれは國際補助語といふ概念が過渡的概念であつて、やがて

消滅すべきものであると決めて、その目標にあらゆる言語的方法を集中する運動のあることを、吾人に牢記せよと迫るものである。

四、國際補助語の概念は消滅しない。ザメンホフの精神はあくまで生きる。從てエスペラントのいはゆる舊派の精神で、エスペラントを尊重する。之が私の動かない態度である。併し國際補助語の問題はエスペラントの普及によつて解決がつくであらうか。それが私の Quo Vadis?『國際補助語よ何處に行くか』と尋ねるところである。エスペラントは、英佛伊西等特に南歐現代諸語にわたつて、國際性の高い單語を取り入れては居る。併し世界七大言語(註)(英語・ヒンデイ＝ウルデユ＝ヒンドスターニ・ドイツ語・ロシヤ語・スペイン語・日本語・ベンガル語)の中、第二位の印度語・第六位の日本語・第七位のベンガル語は眼中にない。英語を商業用國際語に、佛語を外交用國際語に使つて來た世界は、その不公平を歎いてゐるが、現代ヨーロツパ諸語と白人アメリカ諸語としか基礎にしてゐないエスペラントは、それ以外の諸語の民には不公平であると歎ぜらるべきである。

(註) J. R. Firth の Speech, 一九三〇年頁七五參照。

五、千九百三十二年のジユネーヴに於ける言語會議は、この不公平を認識せしめられた。それは千葉勉氏が唱へた抗議によるのであつて、千葉教授はエスペラントに日本語を加味せよと唱へた。而して會議は之を受諾した。併し之は可能なこと、又意義あることを受諾したといふべきか否か。日本單語をエスペラント語に入れることなどは容易である。けれどもそれで、アリアン文法を基礎とするエスペラントに日本語の色彩を加へることが出來たとはいはれな

い。即ち日本單語を入れることが、エスペラントを日本人にも國際語として役立たしめるものとはしない。さやうな加工で吾人の感ずる不公平を除く事は絶對に出來ない。然も外に何等可能な修正法がないとわかつてゐるとすれば、エスペラントの全世界的國際語たる性質は、つゐに求めて得られざるところである。

六、併し國際補助語は必要缺くべからざるものである。吾人は此所に進退谷まるを感ずるが、窮すれば通ずるもので、吾人は今考へ得る最良の解決法を見出し得た。それは單式國際語を捨てて、複式國際語說を採ることである。それは具體化してゐる。ロンドン大學のオグデン C. K. Ogden 教授の創案たる基礎英語 Basic English は、創案者はさうは思はないかも知れないが、吾人のいふ複式國際語の一つである。之にならつた土居光知教授の基礎日本語は又その一つである。勿論之等既成のものは方式上吾人の不可と信ずる幾多の缺陷を持つが、この類のものが國際語として有用であり、國際語問題解決の第一歩であることは、吾人の欣快を以て確信するところである。

七、自然成立の現代諸國語は、皆それぞれの國際用簡易形式語を持つことにし、異言語人との間には之で用を辨ずることに協定する。之は必要に應じて數ケ月、精精一年位で學習を完成し得る。國際會議などは、抽籤とか偶然的順番によつて、二三言語を定めて各國に豫め通告する。代表委員は急遽之を學習する。誠に公平である。斯ういふ簡易言語を、基礎英語などといはずに、國際英語國際日本語などと名づける。之が國際補助語よ何處に行く？ の問に答へる唯一最良の方法である。而して之が『國際日本語の概念』である。英語が世界五億の人口に通ずる事實に型を取つて、日本語が世界語になるといふ、一大願望は、吾人には必ずしも夢とは考へられないものであるが、ここにい

ふ國際日本語とはさういふ概念ではない。國際並立語の一つとしてのみの意味である。

二、言語の人工的構成

八、千八百六十六年パリ言語學會結成にあたつて、人造語問題はその綱領に於て明確に排除せられた。この態度はイエスペルセンによつて明かに否定せられたが、尙一般に言語學の本領として認められてゐる。卽ち言語學は言語事實を記述し說明することを本領としてゐて、言語に然あるべしといふ規定を立てることを避けて居る。併し言語の事實とは決して言語自然の動きのみではない。總ての文化言語が如何に人間の意思によつて動かされてゐるかを、見落してはいけない、十分考慮に入れなければならぬ。斯くして言語の事實を研究し說明するといふ本領は、當然言語人工史をも含むわけである。從來の言語學は、不明にして、この方面を忘却してゐたが、今後はこの蒙を啓いて、言語學を記載の科學たる外に規範の科學たる一面を具へたものたらしめなければならぬ。吾人はこの立場(註)から言語の人工構成をも言語學の一任務とする。

(註) 拙著『言語史講話』(『國語科學講座』三)第一講參照。

九、言語の人工構成は、上の如く、言語學から見ても、昔日の如く罪惡乃至狂態・好事と笑ひ去られない。吾人は安んじてこの勞務を考へ、勉强してこの業績を求めてよろしい。併し人工構成にも工事の細かさに色々程度がある。ヴォラピークは、

(一)文字を二十七に限り、母音八、子音十九とし、

(二)各文字は單一音價しか持たさない。
(三)アクセントは末音節に限る。
(四)活用は只一つで、不規則動詞なし。
(五)語形及び屈折は常に規則的に行ふ。
(六)形容詞・動詞・副詞は必ず名詞からわり出して作る。
(七)自然語に於けるwはvに改め、rはlに改める。
(八)單語は出來る限り單音節語にする。
(九)名詞は轉尾を只一つとし、四格を立てる。
(一〇)形容詞は名詞に ik を添へ、副詞は形容詞にoを添へる。
(一一)oi を添へて女性を表はす。

といやうな手の入れ方で、自然言語の換骨脱胎を企ててゐる。Yulop, Silop, Filop, Talop がそれぞれ、ヨーロッパ・アメリカ・アジア・アフリカ・オーストラリアであるほど、恐ろしい工事が單語に施されてゐる。他は推して知るべしである。

一〇、エスペラントは如何。語彙構成に於てヨーロッパ主要言語から、最大多數の諒解する根語を選び出すこと、接頭・接尾を精選用意して之を用ゐて無限に造語する事を主義としてゐる。文章法は、語順の絶對に近い自由を許す。發

音は書いた通りにする。之等が主要な手續であるが、名詞は o、形容詞は a、複數は j、といふやうな語尾の一定やら、動詞時相の示し方等の新設定やら、自然言語への加工は相當に深入りしてゐる。後天式に成るべく自然言語の單語を生かしながら、edzo（夫）,edzino（妻）の如き、Parizo（巴里）などといふ、隨分エスペラント獨特の單語が出來てゐる。斯ういふ點を指摘するイエスペルセンが、そのノヴィアールに如何なる人工性を用ひてゐるかを見ると、te（茶）,kafe（コーヒー）, chokolate, vine（酒）,sigare（タバコ）,tabake, telefone, papere, lampe など、既に國際的になつたと認められてゐる英語名詞に e 語尾を施して、綴方を改めてゐる。英語の香ははつきりするが、ともかく獨自の加工を施して居る。

一一、見わたすところ、單式國際語の立場では、どうしても諸國語に氣がねをして單語を選び、且つその加工を避けるわけに行かない。文法を簡便に合理化しなければならぬといふ點から、又新しい獨自の文法を立てることを敢てしなければならぬ。複式國際語の立場に於て行ふ人工構成は、之ほどの難工事をすることを企てない。オグデンの「基礎英語」（註）は、英國功利說の祖師ベンザムが、動詞を避けて、名詞を媒介にして動作を示すと、心象の明確度を增すとした、その理論に暗示を得て、語彙を整理した點に特徵がある。卽ち六百の諸事物、百五十の狀態詞、僅か十六の運行詞（動詞）、二十の方位詞（前置詞類）等につづまる程の大整理を行つてゐる外、何等普通英語と違つたところがないやうに見える。無論言ひまはしは大に獨特であり、文法にも獨自性がある。けれども人工構成の深さは從來の人工國際語の手法と比較にならない輕微なものである。複式國際語の立場に於ける人工構成はこの程度であるべきで

ある。

（註）『英語英文學講座』中の岡倉由三郎氏著『アングリックとベイシック』及び東京文理科大學內『英語の研究と教授』卷二號以下の黑田巍氏筆『Basic English に就て』參照。

一二、自然諸國語は、發音上のことは別にして、書で示し得る範圍の性質について言つて見ても、はだか言葉と形式語との組合せで總ての文則を踐み得るものと、一切の文則を語形の變化（屈折法、重疊法、接辭法等）で示すものと、この二極の間に段階を作つて居る。英語などははだか言葉の極に近いものであるから、基礎英語の構成は、單に單語の數の整理だけで、別に語形も變へず、文法も改めないですましてゐる。フランス語やドイツ語では、語形變化の極に近づいて居るから、この構成が相當にむつかしい、即ち加工の程度が深刻である。之はやむを得ないことである。故に複式國際補助語の構成は、一般的にいへば、『基礎』的簡易語構成とは、趣意を別にしなければならぬ。いひかへれば、例へば國際ドイツ語はそのままドイツ語の自然の形式を習得する基礎にはならない。（オグデンの Basic English についても、實は學習の基礎にはならない、全く別系統の簡易英語たるに過ぎない、と評價する人も少くない。）吾人がオグデンの Basic English や土居氏の基礎日本語を例に取るのは、吾人の求める國際英語、國際日本語の爲に、好個の暗示を與へるからであるに過ぎない。複式國際語の構成は、要するに、成るべく自然の形式を保存しつつ簡易な形式を作ることを方針とすべし、といふことが出來る。そしてそれは國語毎に特異な問題があるから、その國語に生活する者が考究すべきであるといはなければならぬ。

三、理知言語

一三、國際補助語を理知の言語に限定するの立場は、イード Ido 構成委員會によつて明かにされた。之はイエスペルセンなどの意見によるのであらう。イエスペルセンはそのノヴィアールに於ても、人工構成語を『あたまの言語』として、自然民族語の『ハートの言語』を侵さないことを明言し居る。吾人の複式國際語も亦嚴重にこの境を守るべきで、感情の激した時は何を言ひ出しても（どんな言語を使ひ初めても）もはや國際語の關知するところではないとする。情操の領域にある文學の研究・實踐の如きは、勿論國際語のあづかるところではない。吾人は國際語を理知の言語に限定しなければ、殆どその構成の見込みを立てることは出來ない。

一四、國際日本語の構成は、他の諸國語に於けるよりは、一層多くこの理知專用の條件に動かされる。蓋し日本語彙の複雜であること、文法形式の範疇的基底の簡單（註一）であるに拘らず、外表的修飾の複雜であることなどは、感情の細かな等級から來てゐるので、之を離れて理知的言語を構成することは、構成者に多大の苦痛を感ぜしめるものであると同時に、之を敢てすれば見ちがへるほど簡易な日本語が出來ると思はれるからである。その感情（註二）とは細かいことは別として、素朴なものでは愛新感情・物忌み感情・飾名感情などであり、醇化され或は加工されたものでは、優越誇示の感情・區別韜晦の感情・身分感情などである。新しいOKをやめて『よし』に、タブーによる『えて』をやめて『猿』に、飾名的の『おなか』をやめて『腹』に、優越感から來る『イズム』をやめて『主義』に、香具師風の『バア』をやめて『八』に、それぞれ整理することは、それほど困難ではないが、この領域は實に大きい。是非整理

すべき感情である。然るに身分感情だけは、領域が恐しく大きくて、然も現段階日本語で之を整理することは、餘程苦しいことである。蓋し之は現段階日本人の身分感情の細かさを整理する所以だからである。

（註一）駒澤大學國漢研究會發行『國漢文の研究』號三、拙稿『日本語法の合理性』參照。

（註二）『國語科學講座』三の拙稿『言語史講話』節三四——三五參照。

一五、身分語排擊はマルキシズム言語學の一スローガンであるが、それは親と子といふ連繫を滅することの出來ない人間界に於ては、行ひ得ないことをねらつたものである。吾人が求める理知言語は、決してさやうな非人間的構成を必要とはしない。『おらがかかあ』と『私の家內』との間にあまりに等級があり過ぎる。そこを中庸に『私の妻』としてはどうか。その程度の身分感情整理を必要とするといふのである。實際吾人の言語は、自分を高くしたり低くしたり、相手を高くしたり低くしたり、第三者を高くしたり低くしたり、之を組合せると實に十二の型が出來て、それぞれの型に又等級別の幾多の表現があるといふ、實に複雜な身分表示法を持つてゐる。この複雜さは文法にも關係してゐる。斯る狀態は、國際日本語の立場でなく、吾人の生活日本語としても、必然に整理の時が來るべきである。吾人は最も理知的で滿足し得る國際日本語の構成によつてそれを促進したいのである。

一六、身分感情による日本語の複雜は、文法にも影響してゐるが、國際日本語の理知性からは、大體語彙の整理で文法の整理も出來ると見てよい。國際日本語の文法上の加工は、相當重大であるが、それは理知言語なるが故にといふよりは、合理的にし簡易にする爲の加工と考へる方がよい。併し感情整理からいつて、いはゆる文體（註）の限定は

多少文法に關係する大切な問題である。理論を具體的にする爲に私案を出すことが許されるならば、吾人は最少限度の崇敬態の一形式にする代りに、敬態と無敬態との二形式を取る。そして無敬態に特定接辭を施せば敬態になるといふ、器械的區別だけで事を運ぶことにする。一寸暗示的に例をあげると、

『太郎さま、わたしは先に行くです。』

『おまえさま　早く　しない　ですか。』

『きよーわ　よい　天氣であるです。しかし　することが　澤山で、そとえ　いくことが　出來ないです。まことにかなしいです。こまつたです。』といつたです。

『之わ　わたしの　おねがひであるです。』

『今から　はじめたいです。』といふです。

『之から　はじまるらしいです。』

などとなる。不自然は初めからわかりきつてゐる。ここの主題は、側點の接頭、接尾を附ければ敬態になり、去れば無敬態になる、この仕組みの必要についてである。

一七、今一つ理知言語にゆとりを殘したいのは、生物無生物の差を大部分なくして行く必要は認めながら、人間と人間以外との差が完全に無視されにくいことである。數へ方などそれである。人間には『一にん、二にん、三にん』の如くいふことにして、他のものについては、『一こ、二こ、三こ』で一貫させる、といふやうに區別する必要が、

感情上否定され難い。之に類した重複は『居る』と『ある』とである。(『ゐる』は認めたくない。)之も今日のところ並存させてよからう。併し『ある』の方ばかり使ふ人があつても、外人には止むを得ないとする。

(註)『國語科學講座』七六『國語純化と基本語』(土居光知著)頁五——參照。

四、語彙の問題

一八、簡易日本語を構成するのに、第一に重要な仕事は語彙の整理である。普通同義語とされるものも、主意・副意・感情價値の三點にわたつて考へると、決して完全に同義ではない。『作る』と『こしらえる』又は『こさえる』とはどうも違ひがある。小學國語讀本に『オイシイ　オベンタウ　ヲ　ツクツテ　アゲマセウ』(頁一三—一四)とあるのを辰野隆氏は『編纂者……は田舍漢らしい』と評して居る。この味の相違は言語として沒却してはならないが、國際日本語構成の爲には、大斧鉞を加へなければならぬ。現代日本語は、僅かの相違を持つた同義語が多過ぎる。生活日本語としても整理の必要があるが、國際日本語として眞先に整理さるべきものである。

一九、然らば如何なる原則で之を行ふか。オグデンの名詞中心主義が最もよいと一口にもいへない。土居教授は動詞をかなり多くして居るが、近代文化に關するものは、漢字の成句であらはして、サ行變格で動詞に轉用する方式を採つた。だからやはり名詞中心主義の傾を示してゐるといつてよい。土居教授の原案を批評することは、ここに直接用のないことであるが『用ゐる——使用する』を一つの考察の材料にして見る。日本語は意味の增減を合成法で表はし、文法の變化を器械的接辭法で示す傾の强い言語であるが、之を考へに置くと、つけたり離したりに有利なやうに單

語を取ることが、極めて重要な原則になる。『用ゐる』を『使ふ』にして簡易語彙に位置を占めさせると、『言葉使ひ、金使ひ、使ひ方、使ひ道、使ふがよい、使はぬがよい』といふやうに、融通が廣いのに反して、之を『使用する』としてしまふと、この融通が狹くなる。總括的にいふのは危險であるが、現在知られてゐる觀念連結が、あまり異樣の感を與へない器械的合成接辭で表はされる爲に、一番融通に富んだ語を採るのが、原則として健全ではないかと思はれる。

二〇、耳に聞いてわかる語詞であることは、あくまで重要な原則である。それは固有の大和言葉でも漢字の成語でもアリアン系の借入語でも、さういふ出所語源の詮索には關係なしに考へるべきものである。尤も同音異義の語は絶對に認めないといふ、やかましい制限を立てることは出來ない。捨てることの出來ないものは、他に同音異義のものがあつても、之を生かさなければならぬ。この場合にアクセントを別にして、その間に區別を立てたらどうか、といふ意見もあるが、それは警戒すべき考である。第一に自然の言語に於けるアクセントの存在は、決して意味の區別の爲ではなく、全く人間有機體全體に亘る律動が發音生理にあらはれた結果である。第二に構成言語としては、アクセントの位置をラテン語の如く、フランス語の如く、器械的に定めた方がよいとさへ言ひ得る。この點は一寸勇氣を要するが、私は器械的に一定音節にきめたい考を持つてゐる。(節三七參照)

二一、接頭、接尾を用意すること、整理することは、又語彙の重要問題である。接頭では敬態の爲の『お』、大小の爲の『おー』『こ』、否定の爲の『ふ』、順序の爲の『第』などを設け、他は之等で滿足し或は長い言ひまはしに讓ることにす

る。接尾では敬態の爲の『さま』、多數の爲の『たち』、順序の爲の『番』、人數の爲の『にん』、人間以外の數につける『個』、形容詞を作る『らしい』、及びその副詞『らしく』、副詞を作る『そー』などを用意して、他は之等で滿或足しは言ひまはしを變へてすますことにする。

二二、數詞は、前項の規定からも推定せられる通り、合成に都合のよいやうに『いち、に、さん、……』の如く、總て音讀に限る。代名詞指示詞などは、

『わたし、おまえ、あの人（あの女の人）、だれ』

『これ、それ、あれ、どれ』

『これら、それら、あれら』（たちの除外例）

『この、その、あの、どの』

『こちら、そちら、あちら、どちら』

『ここ、そこ、あそこ、どこ』

『こー、そー、あー、どー』

『こんな、そんな、あんな、どんな』

時間については疑問『いつ』以外は、合成法又は單なる副詞でよろしい。日本語はこの部分に於て特に類義語が多いから、先づ之を指示するのである。

二三、活用言に於ては、活用の種類を少くすることは、言ふまでもなく、甚だ重要な原則である。動詞は五段活用（例、書カ、キ、ク、ケ、コ）だけにしたい。群小活用カサタナハマヤラワ九行の上一段、ア……ワ十行の下一段、カ行三段サ行三段は併し、悉く廢止といふわけに行かない。殊にサ行三段は五段活用と對立して極めて重要である。他の諸活用については、一つ一つ吟味して、五段又はサ行三段を應用した言ひまはしの工夫で代理させ得るものはさせ、然らざるものは止むを得ず保存する。上一段で『起き、落ち、見』などは保存し、『掘ぢ、似、銹び、報い、おりる、ねる』などは、何とか工夫する。『似』などは『似て居る』、『報い』は『報酬する』、『おりる』は『さがる』、『ね』は『居る』といふやうに改める。下一段についてもさうである。

二四、形容詞はク、イ、ケレの活用一系統であるから、そのままでよい（註）。外に助詞ナを添へるものが澤山あるが、的を附けることはやめる。副詞は活用としてはシクだけで、之に助詞のついたものを澤山使ふことにする。日本語の名詞はそのまま形容詞であり副詞であるといふ融通性に富んでゐるが、之はやはり利用すべきである。

（註）節三二に改めていふ。

二五、助詞、助動詞の整理は最も困難な仕事である。之は文章法のところで扱ふことにする。かかる關係語（註）は勿論別として、內容語（註一）の中で、感覺的、有形的のものを第一義的語彙とし、思索的、抽象的、高級概念的のものを第二義的語彙とすること、之は語彙整理の重要な原則である。そして第二義的のものは、なるべく第一義的のものを組合せて作ることにする。たとへ長くなつても差支ない（註二）。斯うすることによつて、日本語と離れる、殊にイ

ンテリ語彙と離れる心配は大にある。併し之は覺悟してゐなければならぬことで、之を恐れたら初めからこの企ては成立たない。土居氏の認めてゐる『組織、劇、醫術、意識、記憶』などは『くみたて、しばい、いしやのみち、きづき、おぼえ』など（もつと考へなければならないが）で我慢すべきである。

（註一）之らの術語は Sapir の Language に於ける文法概念の二類四目の分け方に從ふ。

（註二）岩波の『教育』特輯號『國語教育』頁一〇——一六『國語による學術語の表現について』（佐久間鼎）參照。

二六、日本の助詞は日本語の精魂のやどるところで、外國人には一番わかりにくいものである。故に國際日本語の構成には、是非之を十分整理してかからなければならぬ。今ほんの一端をいへば、呼格には必ず『よ』を、方法格の內の疑問には必ず『か』を、つける。强意には『こそ、さえ』を選んで『ぞ、すら』をやめる。（『ぞ』は詠歎だけに殘してもよい。）禁止の『な』は從屬文（『行くなと云つた』など）に限定する。屬格には『の』だけを認めて『が』はやめる。位格（及びイエスペルセンの追加した時格）（註）に於て、發着は『から、まで』に限定し、『より』は計量格に於ける比較に限る。具格に『にて』や『を以て』は許さないで、その意味は『で』でしか表はさない。又『死ぬの』は困る』『死ぬのを見た』の『の』は何であるか、助詞でないかも知れないが、この種の表現は『死ぬことは困る』『死ぬところを見た』の如く、あいまいなものを避けて、具體性の多い語にとりかへるやうにする。助動詞についてもこの種類の整理を要するものが多い。一口にいへば、具體性に富む語を使ひ、多義多用をさけるといふ方針を取るにある。

（註）Jespersen の Philosophy of Gammar, P.185 に於ける格の總括表を參照。

二七、オグデンは八百五十語をとなへ、土居氏は一千語をうたふ。併し之になほ幾多のゆとりが豫定されてゐる位で、この制限は必ずしも吾人の語彙整理の根據にしなくてもよい。併し基本語數は少くてすめば少いほどよろしい。少くしておいて、無理にならないやうな、又制限が無爲味にならないやうな、色々なゆとりを考へて置く必要がある。今既にはつきり利用し得るゆとりは二つある。第一は實物、繪畫、圖形の利用である。尤も、甚だしく手數のかかるものは用をなさないから、手輕なものの範圍に於てである。第二は『ポケツト、カラ、シヤツ、ボタン、ペン、インク、ナイフ、コーヒー、ビール、ソーダ、アルミニウム、メートル、リツトル、グラム、キロ、ペーヂ、ポムプ、パイプ、コンクリート、コルク、ガソリン、グラス、セメント、カード』など、土居氏のあげてゐる近世借入語は、世界的になつてゐると思はれる限り、國際日本語彙に入れてよいのであるが、それを語彙本體に入れておかないで、隨意に使つてよいものとする。かの『衝動・軌道・科學・體系』などは、第一義的語彙でやさしく言ひかへられなければ、その場かぎりで西洋語句を借りてもよい。ともかく、目に訴へる方法と、世界的な西洋語句の利用とは、簡易日本語彙を活かす大切な道である。

五、文章法の問題

二八、如何に不自然が許されるにしても、人造國際語にあきたらない複式國際語主義に立つ以上、文章法にまであまり大きな加工を施すわけには行かない。卽ち語彙をいぢりまはすほど思ひ切つて文章法をいぢることは出來ない。併し整理の餘地は相當にある。色色な感じの差とか、特殊系統のものを交ぜるとか、さういふことから一通り以上あ

る文法形式の間に、最もよい一つを選んで、他を捨てるといふことは、決して亂暴な加工ではない。語彙の整理に於ける方針と同じである。一口にいへば、改造ではなく選擇である。

二九、動詞の時は現在と過去とで事は足る。『六月にわよく雨がふる〔です〕』『その頃にわよく雨がふつた〔です〕』。未來は『あすわ雨がふる』に『だらう〔です〕』かも知れない〔です〕。とおもう〔です〕』の如き合成法でよい。『ふろー』の如きは將然形としてあるが、今日では意思、企圖の形である。從て話者の意思を表示するとか、對者、第二者の意思を紹介し、或は擬人的にいふ時しか、用のないものと見てよい。そしてその時は『と思ふ、とゆー、とした』などを添へて用ゐることに限つてよい。時相としては簡單であるが、併し、動詞の活用としては相當複雜な問題がある。『雨がふらない、ふりつづく、ふつてこまる、ふるとこまる、よくふる、ふつた、ふればやめる、ふろーとしておる』のやうに、又『手紙をかかなければ、かきたいだけかいてよろしい、かくことがおもしろいからかく、かいたらかいたといいなさい、かけといわれたからかこーとした』のやうに、又『とばされた、とびそこなつた、とんでみた、うまくとぶ、とぶとりおおとす、たかくとんだ、とべばよいものお、とぼーとしておつた』のやうに、五段活用が五段でおさまらない。いはゆる音便がいる。之もはつきりきめておかなければならぬ。

三〇、助動詞は助詞と並んでことたまのやどる大切なもので、この整理が又一つ重大な仕事である。原則としては諸樣相を明示する別語を加へることにする。意思は、五段活では五段形に、他は一段形＋よーに、『とおもう』などを添へる。想像は五段活では三段形に、他の活用では第二段形に『だろーと思ふ』などを添へる。可能は、同ぐくそれ

それに、『ことが出來る』などを添へる。かの姿態 aspect なども、繼續は『つづいて……ておる』反復は『いつも……ておる、くりかえし……ておる』、完結は『〔ちよーど〕……てしまつた』などといふやうに、十分に副詞など添へることにする。單なる助動詞でやらうと思ふことは、外國人には要求の出來ない文法である。併し假定は終止段形に『ならば』(『ば』を必ず添へる)を、受身は第一段形に『られる』を、使役は同段に『〔さ〕せる』を添へる。(『られる』の可能用法、敬態用法、及び『させる』の方言的敬態用法は認めないことにする。)斯ういふ風に、從來の助動詞の用ゐ得べきものは勿論十分用ゐる。

三一、日本動詞の自動、他動は可なり面倒である。之はむしろ語彙の問題として、あるがままの形をまるのみにさせるべきであるが、又『おちる――おとす』の如き、s r の交換を主として母韻の多少の變化を踏む系統と、『きまる――きめる』『見る――見える(可能でない、外貌の意)』の如き、母韻變化 Ablaut で行く系統と、大體二つあることを基底にして、組織的に記載する文法的取扱ひをも考へに入れておくべきである。

(註) 石黑魯平著『國語教育の基礎としての言語學』節八六參照。

三二、形容詞はク・イ・ケレの活用が認められてゐるが、必ずしも之に拘泥する必要はない。吾人の實際使つてゐる形は、『よかつたらば、よい、よくもわるくもない、よければそれでよいとしよー』の如く、相當に複雜である。之を簡約する爲に『よいとおもつたらば、よい、よいこともわるいこともない、よいならばそれでよいとしよー』の如く『よい』と統一してしまつてよい。そして副詞に『よく』を讓つてしまふ。形容詞に考へられ相な『御機嫌よく』は

副詞であるから、さしつかへない。(『御』は『お』になほす。(節二一參照。))形容詞『ない』も之で律せられる筈であるが、『なければならない』はどうするか。之は一つの助動詞として別にきめて置く。

三三、存在態は『がおる、わおる』『がある、わある』でよろしいが、單なる述語補足としては、『あの山わ高い』のやうに活用言には何も不要であること、英語などに於けると大に違ふ。然るに『この花は綺麗』の次の補足はやはり『である』がよい。『である』で統一する。『だ』は從屬文にも使はないことにする。『花であるとおもう、花であらうとおもう、花であつたとおもう』の如くする。之等は無敬態であつて、敬態は文末に限つて『です』を施す。『花があるです、ねうちわあるです、あの山わ高いです、綺麗であるです、花であるとおもうです、花であらうとおもうです、花であつたとおもうです』の如くする。

三四、まだ考へるべきことは澤山あるが、省くことにして、文章の構成について一言する。日本語には主語を缺くことが珍しくない。之は保存すべき性質で、不明を來たさない限り主語なしで行く。次に文章は短くすることに努めるる。長い文章を作ることは、日本語の一大缺點である。『……して……で』など、只拉列して長くする弊は改めなければならぬ。尤も『……のであるが……であるところの……である時に』などの如く、いはゆる複文の必要は十分ある。その場合に『……けれども(節三二)……にも拘らず……であると(節二六)』などは使はないことにする。『……が故に』などは『…から』に一定する。又『鳥といふものがそらおとぶ力おもつておるといふことくらいわ』の如く、『といふ』が日本語にはありすぎる。之は全廢し難いけれども、ずつと惜んで使ふことにする。

六、音韻

三五、單音の範圍は、a i u e o p b t d k g m n ŋ r w f s z ʃ ʒ ç j h の二十五に限定する。連音としは、〔ti, tʃi tu, tsu, di, dʒi, du, dzu〕の結合を認めなければならぬ。特殊な結合は〔pi, fu, çi〕などを設定してしまふ。ŋは鼻音の次の g に限つて使ふことにし、語の途中は皆りだとする立場をすてる。『完全、進軍、休んで』はそれぞれ〔kã:ze:ĩ〕〔ĩ:gũ:ĩ〕〔jasũ:de〕などの如く發音する。即ちンは凡て母音の鼻音化にしてしまふ。尤も次の子音の都合で、わたりのmnŋがはいるのはやむを得ないとする。

三六、膠着性日本語の特性を利用して、合成語を作ることは、自然盛に行はれるが、その時に同化作用を許さないのを原則にすべきである。列へば『第一回』はダイイチカイといつて、ダイイツカイとはいはない。『八方・十錢』はハチホー、ジューセンとする。又、『やくそく』はヤクソクの如く無聲化させない。『手近な』といふ合成語を作るとして、そこに實際行はれる連濁法テヂカナなどは之を本則と認めないで、テチカナとする。之等は隨意に作り得る合成語についてであつて、初めから語彙に取り入れてある合成語に於ては『地震』(ヂシン)『學校』(ガッコー)『裁判』(サイバン)『失敗』(シッパイ)『雜誌』(ザッシ)などの如く、連音上の變化をそのまま認める。動詞の活用に於て『勝ちて、買いて、賣りて』をカッテ、カッテ、ウッテとすること、『咲きて、漕ぎて』をサイテ、コイデとすること『死にて、讀みて、呼びて』をシンデ、ヨンデ、ヨンデとすること等、いはゆる音便變化も亦、既成形としてそのまま認める。

三七、アクセントについては、さしあたり關東アクセントに從ふ。併し國際日本語構成の爲に普通に使ふ以外の語句が生ずる。之については、第一音節にアクセントを置くことにする。但し一音節以上の助詞助動詞までも之に準ずることは不穩當であつて、それらは常に附隨的地位に置いて、特に平坦アクセントで言ふことにする。吾人の日本語に於ていふところのアクセントは、高低アクセントであるが、今日の日本語が次第に强弱アクセントを使ひ初めてゐるのに鑑みて强弱アクセントを加味してもよい。併し同化作用を局限する立場や、多少長くなつても語彙を狹くしたいといふ立場に鑑みると、高低アクセントを主とするがよろしい。

七、結び

三八、以上決して全局を言ひ盡してはゐないが、大體の理論はおほはれてゐる。之は言語自然の發達に對して、幾つか逆行運動を敢てするものであるが、それは國際的補助的簡易化日本語としてやむを得ないところである。然も之が日本人の生活言語の整理に、必ず有益な暗示となり指針になることは、吾人の確信するところである。この理論に基づいて、いよいよ國際日本語を構成することに機運が向つた時の爲に、吾人は特に二つの事項を提言しておく。第一に、之は文部省又は學士院の如き機關が行ふべきであつて、その機關は先づ理論を研究し、實際語彙と文章法と書記法と發音法とを確立して、テキストを作らなければならぬ。第二に、書記法はローマ字に或る修正を施したものでなければならぬ。その修正程度は、印刷に甚だしい困難を來たさない限り、思ひ切つて大きくやるべきである。卽ち或る種の記號象形をも加へるべきである。之等のことは決して容易な、物ずき的な仕事ではない。日本人が眞劍にや

るべきことであつて、假名遣改正にからんだやうな感情の爭ひで兄弟喧嘩をしないで、各國とその出來ばえを競爭するといふ、大きな腹で行ふべきである。